

研究成果の紹介

一次伝染源対策で元から絶つタマネギベと病

タマネギベと病の一次伝染源対策について検討してきた各個別技術を前作の被害程度に応じて適用すると、被害が少ない場合は水稻作付けを推奨し、被害程度が中以上では湛水処理(45日以上の厳守)、湛水できない圃場では石灰窒素施用による残渣の腐熟促進が必須である。

内容

タマネギ栽培における最重要病害の一つであるべと病の防除対策を考える場合、本病の伝染環(図1)を把握することが重要である。葉などの発病残渣内のかびが土壌に生き残り、翌年の伝染源となって病気が発生する。その発病の起点となる一次伝染源対策の成否が、続いて起こる二次感染の発生程度に大きく影響する。そのため、一次伝染源対策技術について種々検討を行い、発病残渣を早期に腐熟させる技術の有効性を明らかにしてきた。そして前作圃場の被害程度に応じて適切な対策を適用した(図2)。

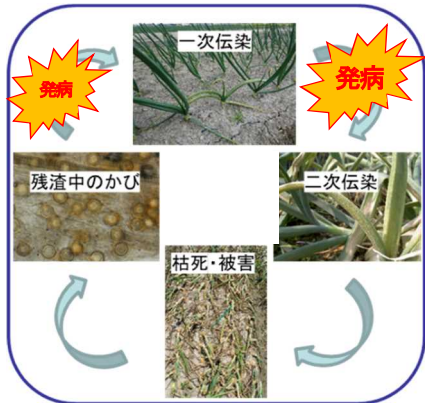
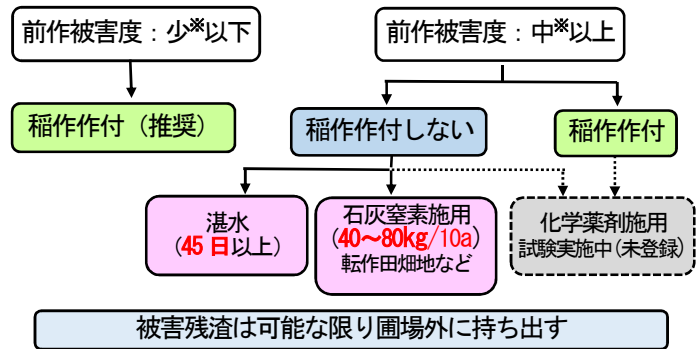


図1 タマネギべと病の伝染環



※少：本圃での発生が数株、中：同数株以上

図2 前作の被害程度別のべと病一次伝染源対策



写真1 収穫後の圃場における湛水

収穫後圃場を45日間以上湛水する。湛水前に圃場の均平をとる。



写真2 石灰窒素施用による発病抑制

石灰窒素の施用量は60kg/10aを基準とし、前年のべと病発生量に応じて40~80kg/10aとする。施用時期は前作収穫後の残渣すき込み時を厳守する。

前作被害が少ない圃場においては、水稻作付け(湛水)を推奨し、被害程度が中以上では湛水(45日以上を厳守)を推奨する(写真1)。湛水が行えない圃場においては石灰窒素施用(写真2)による残渣の腐熟促進により湛水とほぼ同等の効果が得られる。これらの対策とともに被害残渣を圃場外に持ち出すことは、圃場衛生という意味で病害防除の基本技術である。

今後の方針

本技術により一次伝染源は減少するが、二次伝染対策のため圃場巡回、罹病株の抜き取り、薬剤施用も実施する必要がある。また、べと病は突発的に大発生する場合があるので、発生状況の把握に努める。

岩本 豊 (病害虫部)